

伊豆半島南部地域における新規野菜類利用に向けた自生植物の探索

静岡県農林技術研究所伊豆農業研究センター 栽培育種科 山際 豊

1. はじめに

静岡県東部に位置する伊豆半島の南部地域では、標高 1,000m を越える天城山麓から海岸線に至るまで、多様な環境条件のもと数多くの食用可能な植物が自生している。その中には、昔から畑地で郷土野菜として栽培利用されているアスタバやフキがある（図-1、図-2）が、その他にも多くの食用可能な植物が存在している。

これらの自生の食用可能な植物は、一般に山菜あるいは野草として山野から採取され食されているが、これらを地域特産の野菜として栽培、出荷し、住民や地域の旅館や民宿で安定して利用できるようにすることにより、地域の特徴を活かした食材として楽しんでいただけたらと考えた。

このため、地域に自生している食用可能な植物および利用実態を調査し、今後地域の新規野菜類として利用を進める植物を選定した。



図-1 林縁などに多いアスタバ

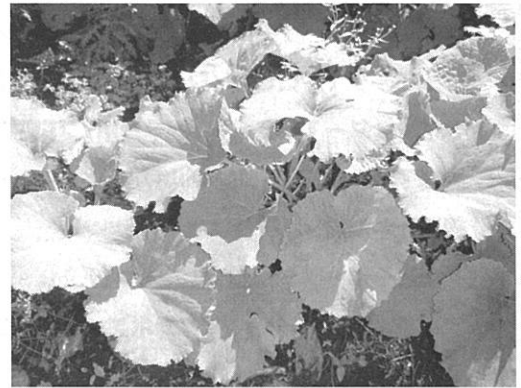


図-2 共販出荷されているフキ

2. 食用可能な自生植物の実態

調査地域は静岡県伊豆半島の南部（東部、南部、西部の3地域）とし、主に国道や県道沿いの集落周辺で、林縁、河口および海辺合計 66 カ所を調査地点とした（図-3）。調査期間は主要な植物がみられる平成 23 年 3 月から 7 月の 4 ヶ月間とした。

なお、「自生植物」とは栽培品種を除く、明らかに現地において増殖が認められる種類とした。

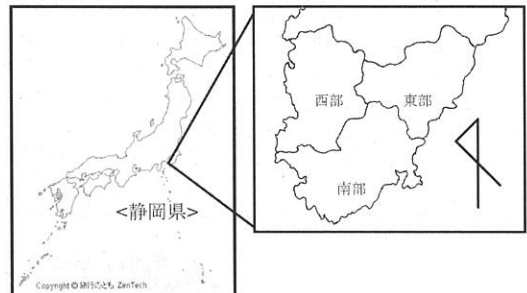


図-3 調査地域

調査対象とした植物は、食用となる草本類、木本類およびシダ類とした。検索誌などの文献により種名を同定したが、判然としないものについては除外した。達観により、調査地の植物量として、◎ (多い), ○ (普通), △ (少) の

三段階に分けて調査した。

表-1 に分類、種名、生育環境、利用部位、地域別の目視調査による個体量を示した。伊豆半島南部で確認できた食用可能な植物は合計 41 科 103 種類であった。草本類はアシタバや

表-1 伊豆半島南部における食用可能な自生植物の概要と個体量

No.	分類 ^z	種名	利用部位 ^y	確認場所	個体量 ^x			No.	分類	種名	利用部位	確認場所	個体量		
					東部	南部	西部						東部	南部	西部
1	草本	アオミズ	A	林縁	○	○	○	53	ハマアザミ	B, R	海辺		○	△	
2		アシタバ	B	林縁、海辺	◎	◎	◎	54	ハマエンドウ	B, C, S	海辺		○	○	
3		アレチギシギシ	B	林縁、河口	◎	◎	◎	55	ハマソウガ	B, C	海辺		◎	△	
4		イスアサツキ	B, R	海辺		△		56	ハマウツリナ	B	海辺		○	○	
5		イタドリ	B	林縁、河口	◎	◎	◎	57	ハマアザミ	A	海辺	◎	◎	◎	
6		イヌガサシ	B	林縁	○	○	○	58	ハマボウフウ	B	海辺		△		
7		イタバゴ	B	林縁		△	△	59	ハルサキヤマカ	B, C	河口 ⁴	○	◎	◎	
8		ウシハコベ	B	林縁	◎	◎	◎	60	ハルシオン	B, C	林縁	◎	◎	◎	
9		ウバユリ	B, R	林縁	◎	◎	◎	61	ヒメジヨオン	B, C	林縁	◎	◎	◎	
10		ウラボシ	A	林縁	○			62	ヒルガオ	B	林縁	◎	◎	◎	
11		オオハコ	B	林縁	◎	◎	◎	63	ヒロハクキ	B, C	海辺		○	△	
12		オカシ	B	海辺		△		64	フウトウカズラ	S	林縁	◎	◎	◎	
13		オランダカ	B, C	河口	○	○	○	65	フキ	B, C	林縁	◎	◎	◎	
14		カキト	B	林縁	○	○	○	66	ヘビイチゴ	S	林縁		○	○	
15		カナムグラ	B	林縁	◎	◎	◎	67	ホタルブクロ	B, C	林縁		○	○	
16		カラスウリ	B, S	林縁	○	○	○	68	ホトケアザミ	B	海辺		○	△	
17		カラスノエンドウ	B, S	林縁	◎	◎	◎	69	ホトケアザミ	B	林縁		○	○	
18		カントウタンポポ	B, R	林縁	◎	◎	◎	70	ミツク	B	林縁		○	○	
19		ギシギシ	B	林縁、河口	◎	◎	◎	71	ムラサキツメクサ	B, C	林縁	◎	◎	◎	
20		キランソウ	B	林縁	◎	◎	◎	72	モミジガサ	B	林縁		○	○	
21		クサスキ	B	海辺、林縁		○	○	73	ヤブガラシ	B	林縁	◎	◎	◎	
22		クズ	B, R	林縁、河口	◎	◎	◎	74	ヤブヘビイチゴ	S	林縁		△		
23		ゲンゲ	B, C	林縁	○	◎	◎	75	ヤブレガサ	B	林縁	◎	◎	◎	
24		コアザミ	B	林縁	△	○	○	76	ヤマキホコリ	B	林縁		○	○	
25		コウゾ	B	林縁	○	○	○	77	ヤマノイモ	S, R	林縁		○	○	
26		コバギ	B	林縁	△	△		78	ヤマユリ	R	林縁		○	○	
27		コマツユク	B, C	海辺	◎	◎	◎	79	ヤマツツク	B, R	林縁		△		
28		ササユリ	R	林縁	△	○		80	ユキシタ	B	林縁	◎	◎	◎	
29		サルトリハバラ	B	林縁	◎	◎	◎	81	ヨモギ	B	林縁、河口	◎	◎	◎	
30		シロギ	B	海辺			◎	82	ワレモコウ	B	林縁		○	○	
31		シロツメクサ	B, C	林縁	◎	◎	◎	83	シダ	B	林縁	△	○	○	
32		スイバ	B	林縁、河口	◎	◎	◎	84	スキナ	B	林縁	◎	◎	◎	
33		スカシユリ	R	海辺		△	△	85	ゼンマイ	C	林縁	◎	◎	◎	
34		スズメノエンドウ	B	林縁	○	○	○	86	ワラビ	B	林縁	◎	◎	◎	
35		セリ	A	林縁、河口	◎	◎	◎	87	アケミ	B	林縁	◎	◎	◎	
36		タチツボ	B, C	林縁	◎	◎	◎	88	アケミ	S	海辺		○	△	
37		タネツケバナ	B	林縁	◎	◎	◎	89	アケミ	B, S	林縁	◎	◎	◎	
38		チガヤ	C	林縁	◎	◎	◎	90	イヌビロ	B, S	林縁	◎	◎	◎	
39		ツユクサ	B, C	林縁	◎	◎	◎	91	ガシ	S	林縁	◎	○	○	
40		ツリガネ	B	林縁		○		92	クコ	B, S	海辺		○	○	
41		ツルハ	B	林縁	◎	◎	◎	93	クサギ	B	林縁	◎	◎	◎	
42		ツルナ	B	海辺	○	◎		94	ゴア	B	林縁		◎		
43		ツワブキ	B, C	林縁、海辺	◎	◎	◎	95	ギンショウ	B, S	林縁	△	△	△	
44		トクク	B, C, R	林縁	◎	◎	◎	96	スズメ	B	林縁		○	○	
45		ナズナ	B	林縁	◎	◎	◎	97	ハナカ	B	林縁		△		
46		ナルコユリ	B	林縁	◎	◎	◎	98	ハリキ	B	林縁		○	○	
47		ネオイチツボ	B, C	林縁	◎	◎	◎	99	アケミ	S	林縁		○	○	
48		ノアザミ	B, R	林縁	◎	◎	◎	100	マツタビ	S	林縁	△	△	△	
49		ノナン	B, C	林縁		○	○	101	ムハ	S	林縁	△	△	△	
50		ヒル	B, R	林縁、海辺	◎	◎	◎	102	ヤナギ	S	林縁	△	△	△	
51		ハコベ	B	林縁	◎	◎	◎	103	ヤマカ	B, S	林縁	◎	◎	◎	
52		ハコグ	B	林縁	◎	◎	◎								

^z 日本の野生植物 (平凡社) の分類による

^y A: 全体 B: 芽、若葉、C: 蕾、花 S: 種子、果実、むかご、R: 根、鱗茎

^x 1 調査地点あたり、◎: 多、○: 普通、△: 少

^w 指定植物 (自然公園法に基づく保護地域内では、許可がなければ採取不可)

イタドリのように全ての地域の林縁や河口に面的な群落を形成する種類も多く見られたが、ウワバミソウは東部の林縁のみに見られ、オカヒジキ(図-3)は南部の海辺にわずかに見られるなど、一部の地域のみ見られるものがあった。利用部位については、(A)植物全体を利用するアオミズやウワバミソウ、セリなどがあった。(B)芽、若葉を食用とするものは多く、アレチギシギシやイヌガラシ、ウシハコベなどが見られた。また、(C)花や花蕾を食用とするものとして、オランダガラシやゲンゲ、コマツヨイグサがあった。(S)種子、果実やむかごを食用とできるものは、ハマエンドウ、フウトウカズラ、ヘビイチゴなどがあった。一方、(R)根部を食用にできるものは、ウバユリ、カントウタンポポ、クズなどがあった。草本類は、林縁や海辺など複数の環境条件で確認できるものが多かった。

シダ類については、スギナ、ゼンマイおよびワラビについては、全域に多くの個体量を確認できたが、ジュウモンジシダ(図-4)の個体量はやや少なかった。

木本類は、アカメガシワやアケビなどが全域に多く確認できたが、コアジサイやマタタビは



図-3 海辺にみられるオカヒジキ



図-4 ジュウモンジシダ

少なかった。また、全体的に新芽や果実を食用とするものが主であった

3. 地域内の自生植物利用実態

(1) 農産物直売所における販売状況

2カ所の直売所で地域性があると思われる食用可能な自生植物の販売品調査を平成23年3月～12月にかけて月別に行った結果、ツワブキ、タラノキ、ノビル、セリおよびモミジガサの5品目を確認した(表-2)。なお、ここでは地域内の流通量が比較的多いアシタバ、フキおよびワラビを除いた。

ノビルは3月から5月および12月に葉を束ねて根部を付けたものを販売していた。ツワブキは20cm程度の新芽をフキと同様に束ねて販売していた(図-5)。タラノキやセリは、パックやビニールに入れて販売していた。モミジガサは、6月に地上部20cmを束ねて水に挿し

表-2 食用可能な自生植物の販売品目と時期

	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12月
ツワブキ	←	→								
タラノキ	←	→								
ノビル	←	→								←
セリ		←	→							
モミジガサ			←	→						



図-5 ツワブキ（磯ふき）の販売



図-6 ノビルの松前漬け

て販売していた。

(2) 利用経験と調理品

平成23年10月20日に、地域の主に50歳以上72名を対象に、利用経験のある品目および調理品について複数回答可でアンケート調査した。その結果、14種類が確認された(表-3)。その中で、ノビルと回答した人数が15人と最も多く、漬け物や和え物、煮物および天ぷらとして利用されていた。

また、ツワブキも回答人数が13人と多く、

漬け物や煮物に利用されていることがわかった(図-6)。その他には、モミジガサが3人、セリ、ツルナおよびウバユリが2人それぞれ利用の回答があった。セリは、南部では肉飯の材料として法事の際などに郷土料理として利用されていた。一方、イタドリやオカヒジキ、ゼンマイなどは、回答人数は1人と少なかった。

4. 新規野菜類候補の選抜

伊豆半島南部地域には103種類の食用可能な植物が見られたが、実際に直売所での販売実

表-3 品目別調理品名

品目	回答人数 ^z	主な調理品名
ノビル	15	松前漬け、胡麻和え、天ぷら
ツワブキ	13	ぬか漬け、醤油味の煮付
モミジガサ	3	天ぷら、おひたし
セリ	2	肉飯、酢味噌和え
ツルナ	2	天ぷら
ウバユリ	2	蒸かし、煮付け
イタドリ	1	炒め物、甘辛味付け
ウバミソウ	1	おひたし
オカヒジキ	1	炒め物
ゼンマイ	1	煮付け
ツクシ	1	油炒め、佃煮、おひたし
アザミ	1	味噌漬け
ユリ類	1	煮物
ユキノシタ	1	天ぷら

^z n=78.複数回答可

績や利用実態があるものについては15種類程度であった。

これらをふまえて、地域の特色ある新規野菜類の候補として、ノビル、ツワブキ、モミジガサ、ウバミソウ、オカヒジキ、ボタンボウフウ、ウバユリ、ヤブレガサ、ジュウモンジシダ、ハマダイコンおよびツルナ合計11種類を選抜した。

地域に幅広く自生し、食用としてよく利用されているが、野菜として生産されていないノビルやツワブキおよびモミジガサは、安定して生産流通させることにより、いっそうの活用をすすめる。

また、地域内ではほとんど利用されていないが、他地域でよく利用されているものがある。ウバミソウ・オカヒジキは主に東北地方、ハマダイコンは島根県、ボタンボウフウは沖縄県、ツルナは全国的に野菜として栽培や利用が見られる。今後地域でも新たな野菜類として利用をすすめる。

一方、全国的にあまり利用されていないが、図鑑などに食用として紹介され、特に伊豆半島南部地域に多く自生しているウバユリ、ヤブレガサおよびジュウモンジシダは、野菜として安定生産することにより、地域の新たな需要を喚起し、新たな特徴のある食材として活用をすすめていく。

今後は栽培に向けた生態調査を行うとともに、利用方法について検討する。

なお、木本類については、収穫までに時間がかかることや、新芽や果実など特定の部位を時期など限定的に利用することが多いため、新規野菜類の候補からは除いたが、カジイチゴやフイチゴなどのキイチゴ類の果実は、生食以外に加工品利用ができることから、野菜とは異なった新たな自生植物利用の可能性があると考

えられた。

おわりに

本研究を行うにあたり、農産物直売所や地域内在住者に調査協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

参考・引用文献

- 今井國勝・今井万岐子 2009 よくわかる山菜
大図鑑 永岡書店
- 橋本郁三 2007 食べられる野生植物大事典
草本・木本・シダ 柏書房
- 杉本順一 1962. 伊豆の植物 社団法人東京
緑友会
- 近田文弘 1981 静岡県の植物群落 第一法規
出版会社
- 宮脇昭・奥田重俊・藤原一絵・大野啓一・中村幸人・
村上雄秀・鈴木伸一 1987 静岡県の潜在
自然植生 静岡県
- 杉本順一 1965. 日本草本植物総検索誌 I
双子葉篇 六月社刊
- 杉本順一 1973. 日本草本植物総検索誌 II
単子葉篇 六月社刊
- 杉本順一 1966. 日本草本植物総検索誌 III
シダ篇 六月社刊
- 佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亘理俊次・
富成忠夫 1985 フィールド版日本の野生
植物 草本 株式会社 平凡社
- 佐竹義輔・原寛・亘理俊次・富成忠夫 1993
フィールド版日本の野生植物 木本 株式会社
平凡社
- 岩槻邦男 1992 日本の野生植物 シダ 株式会社
平凡社
- 清水矩宏・森田弘彦・廣田伸七 2001 日本
帰化植物写真図鑑 全国農村教育協会